

# よく利く薬とえらい薬

宮沢賢治

青空文庫



清夫は今日も、森の中のあき地にぼらの実をとりに行きました。そして一足冷たい森の中にはひりますと、つぐみがすぐ飛んで来て言ひました。

「清夫さん。今日もお薬取りですか。

お母さんは どうですか。

ぼらの実は まだありますか。」

清夫は笑って、

「いや、つぐみ、お早う。」と言ひながら其処そこを通りました。

其の声を聞いて、ふくろふが木の洞ほらの中で太い声で言ひました。

「清夫どの、今日も薬をお集めか。」

お母は すこしはいゝか。

ばらの実は まだ無くならないか。

ゴギノゴギオホン、

今日も薬をお集めか。

お母は すこしはいゝか。

ばらの実は まだ無くならないか。」

清夫は笑つて、

「いや、ふくろふ、お早う。」と言ひながら其処を通りすぎました。

森の中の小さな水溜りの葦の中で、さつきから一生けん命歌つてゐたよし切りが、あわてて早口に云ひました。

「清夫さん清夫さん、

お薬、お薬お薬、取りですかい？

清夫さん清夫さん、

お母さん、お母さん、お母さんはどうですかい？

清夫さん清夫さん、

ばらの実ばらの実、ばらの実はまだありますかい？」

清夫は笑って、

「いや、よしきり、お早う。」と云ひながら其処を通り過ぎました。

そしてもう森の中の明地あきちにきました。

そこは小さな円い緑の草原で、まつ黒なかやの木や唐檜たうひに囲ま

れ、その木の脚もとには野ばらが一杯に茂って、丁度草原にへりを取ったやうになってゐます。

清夫はお日さまで紫色に焦げたばらの実をポツンポツンと取りはじめました。空では雲が旗のやうに光って流れたり、白い孔くじや雀くの尾のやうな模様を作つてかゞやいたりしてゐました。

清夫はお母さんのことばかり考へながら、汗をポタポタ落して、一生けん命実をあつめましたがどう云ふ訳かその日はいつまで経たつても籠かごの底がかくれませんでした。そのうちにもうお日さまは、空のまん中までおいでになつて、林はツーンツーンと鳴り出ししました。

(木の水を吸ひあげる音だ)と清夫はおもひました。

それでもまだ籠の底はかくれませんでした。

かけすが、

「清夫さんもうおひるです。弁当おあがりなさい。落しますよ。それら。」と云ひながら青いどんぐりを一粒ぼたと落して行きま  
した。

けれども清夫はそれ所ではないのです。早くいつもの位取つて、  
おうちへ帰らないとならないのです。もう、おひるすぎになつて  
旗雲がみんな切れ切れに東へ飛んで行きました。

まだ籠の底はかくれません。

よしきりが林の向ふの沼に行かうとして清夫の頭の上を飛びな  
がら、

「清夫さん清夫さん。まだですか。まだですか。まだまだまだまだまあだ。」と言つて通りました。

清夫は汗をポタポタこぼしながら、一生けん命とりました。いつまでたつても籠の底はかくれません。たうとうすっかりつかれてしまつて、ぼんやりと立ちながら、一つぶのぼらの実を唇くちびるにあてました。

するとどうでせう。唇がピリツとしてからだがブルブルツとふるひ、何かきれいな流れが頭から手から足まで、すっかり洗つてしまつたやう、何とも云へずすがすがしい気分になりました。空まではつきり青くなり、草の下の小さな苔こけまではつきり見えるやうに思ひました。



それに今まで聞えなかつたかすかな音もみんなはつきりわかり、いろいろの木のいろいろな匂にほひまで、実に一一手にとるやうです。

おどろいて手にもつたその一つぶのばらの実を見ましたら、それは雨の雫しづくのやうにきれいに光つてすきとほつてゐるのでした。

清夫は飛びあがつてよろこんで早速それを持って風のやうにうちへ帰りました。そしてお母さんに上げました。お母さんはこはごはそれを水に入れて飲みましたら今までの病氣ももうどこへやら急にからだがピンとなつてよろこんで起きあがりました。それからもうすっかりたつしやになつてしまひました。

※

ところがその話はだんだんひろまりました。あつちでもこつちでも、その不思議なばらの実について評判してゐました。大かたそれは神様が清夫にお授けになつたもんだらうといふのでした。

ところが近くの町に大三だいざうといふものがありました。この人からだがまるで象のやうにふとつて、それにせ金使ひでしたから、にせ金ととりかへたほんたうのお金も沢山持つてゐましたし、それに誰たれもにせ金使ひだといふことを知りませんでしたから、自分だけではまあこれが人間のさいはひといふものでおれといふものもずるぶんえらいもんだと思つて居ました。ところがたゞ一つ、どうもちかごろ頭がぼんやりしていけない息がはあはあ云つて困

るといふのでした。お医者たちはこれは少し喰べすぎですよ、もう少しごちそうを少くさへなされば頭のぼんやりしたのもからだのだるいのもみんな直りますとかう云ふのでしたが、大三はいつでも、いゝやこれは何かからだに不足なものがある為<sup>ため</sup>なんだ、それだから、見ろ、むかしは脚<sup>かく</sup>気<sup>け</sup>などでも米の中にも毒があるためだから米さへ食はなけあなほるつて云つたもんだが今はどうだ、それはビタミンといふものがたべものの中に足りない為だとかう云ふんだらう、お前たちは医者ならそんなこと位知つてさうなもんだといふやうな工<sup>ぐ</sup>合<sup>あひ</sup>に却<sup>かへ</sup>つて逆にお医者さんをいぢめたりするのでした。

そしてしきりに、頭の工合のよくなつて息のはあはあや、から

だのだるいのが治つてそしてもつと物を沢山おいしくたべるやうな薬をさがしてゐましたがなかなか容易に見つかりませんでした。そこへ丁度この清夫のすきとほるばらの実のはなしを聞いたもんですからたまりません。早速人を百人ほど頼んで、林へさがしにやつて参りました。それも折角さがしたやつを、すぐその人に呑のまれてしまつては困るといふので、暑いのを馬車に乗つて、自分で林にやつて参りました。それから林の入口で馬車を降りて、一足つめたい森の中にはひりますと、つぐみがすぐ飛んで来て、少しあき呆れたやうに言ひました。

「おや、おや、これは全体人だらうか象だらうかとかとにかくひどくふと肥つたもんだ。一体何しに來たのだらう。」

大三は怒って、

「何だと、今に葉さへさがしたらこの森ぐらゐ焼つぶくつてしまふぞ。」と云ひました。

その声を聞いてふくろふが木の洞ほらの中で太い声で云ひました。

「おや、おや、つひぞ聞いたこともない声だ。ふいごだらうか。

人間だらうか。もしもふいごとすれば、ゴギノゴギオホン、銀をふくふいごだぞ。すてきに壁の厚いやつらしいぜ。」

さあ大三は自分の職業のことまで云はれたものですから、まっ赤になつて頬ほほをふくらせてどなりました。

「何だと。人をふいごだと。今に葉さへさがしてしまつたらこの林ぐらゐ焼つぶくつてしまふぞ。」と云ひました。

すると今度は、林の中の小さな水溜りみづたまの蘆あしの中に居たよしきりが、急いで云ひました。

「おやおやおや、これは一体大きな皮の袋だらうか、それともやつぱり人間だらうか、おどろ愕いたもんだねえ、愕いたもんだねえ。びつくりびつくり。くりくりくりくりくり。」

さあ大三はいよいよ怒って、

「何だと畜生。薬さへ取ってしまったらこの林ぐらゐ、くるくるんに焼つぶくって見せるぞ。畜生。」

それから百人の人たちを連れて大三は森の空地に来ました。

「いゝか、さあ。さがせ。しつかりさがせ。」大三はまん中に立つて云ひました。

みんなガサガサガサガサさがしましたが、どうしてもそんなものはありません。

空では雲がしろうなぎ白鰻のやうに光ったり、白豚のやうに這はつたりしてゐます。

大三は早くその薬をのんでからだだがピンとなることばかり一生けん命考へながら、汗をポタポタ滴たらし息をはあはあついて待つてゐました。

みんなはガサガサガサガサやりますけれどもどうもなかなか見つきりません。

そのうちにもうお日さまは空のまん中までおいでになつて、林はツーンツーンと鳴り出しました。あゝなるほど、脚かくけ気けの木がビ

タミンをほしいよほしいよと云ってるわいと、大三は思ひました。それでもまだすきとほるばらの実はみつかりません。

かけすが、

「やあ象さん、もうおひるです。弁当おあがりなさい。落しますよ。そら。」

と云ひながら、栗くりの木の皮を一切れポタツと落して行きました。「えい畜生。あとで鉄砲を持って来てぶつ放すぞ。」大三ははぎしりしてくやしがりしました。

空では白鰻のやうな雲も、みんな飛んで行き、大三は汗をたらしました。まだ見つかりません。よしきりが林の向ふの沼の方に逃げながら、



「ふいごさん。ふいごさん。まだですか。まだですか。まだまだまだまあだ。」

と云つて通りました。

もう夕方になりました。そこでみんなはもうとてもだめだと思つてさがすのをやめてしまひました。大三もしばらくは困つて立つてゐましたが、やがてポンと手を叩たたいて云ひました。

「ようし。おれも大三だ。そのすきとほつたばらの実を、おれが拵こぎへて見せよう。おい、みんなばらの実を十貫目ばかり取つて呉くれ。」

そこで大三は、その十貫目のばらの実を持って、おうちへ歸つて参りました。

それからにせ<sup>がね</sup>金製造場へ自分で降りて行つて、ばらの実をるつぼに入れました。それからすきとほらせる為に、ガラスのかけらと水銀と塩酸を入れて、ブウブウとふいごにかけ、まつ赤に灼<sup>や</sup>きました。そしたらどうです。るつぼの中にすきとほつたものが出て来てゐました。大三是よろこんでそれを呑<sup>の</sup>みました。するとアプツと云つて死んでしまひました。それが丁度そのばんの八時半ごろ、るつぼの中にできたすきとほつたものは、実は昇<sup>しやうこう</sup>汞といふいちばんひどい毒薬でした。





# 青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第八卷」筑摩書房

1979（昭和54）年5月15日初版第1刷発行

1984（昭和59）年1月30日初版第7刷発行

入力：林 幸雄

校正：久保格

2002年10月27日作成

2003年6月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# よく利く薬とえらい薬

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>